2019/6/30　中野教会　「聖書の学び」

**「第一エノク書：人の子」**

　中間期文書からテーマを取り上げ、それが新約聖書の中での考え方にどうつながるのかを考察してきました。今回は、「人の子」を取り上げたい、と思います。新約聖書の中で、特に福音書のなかに「人の子」という言葉が沢山出てきます。中間期文書で「人の子」が多数でてくるのが「第一エノク書」別名「エチオピア語エノク書」です。まず、新約聖書特に福音書での「人の子」の使われ方をみて、次に、創世記からの旧約聖書での「人の子」の使用のされかたをみて、そして中間期の「人の子」をみます。旧約と中間期文書の連続性と意味内容の変化をみて、新約における「人の子」との連続性と断絶の両面をみて、中間期文書の新約への影響を見る、といいう作業をやりたい、と思います。

　まず、第一エノク書における「人の子」について見ることからお話します。第一エノク書があるのですから第二エノク書というのもあります。これは「スラブ語エノク書」ともよばれますが、天国の階層について黙示を記している文書です。「人の子」とは無関係です。第一エノク書が通常ただ「エノク書」と呼ばれていますので、これから「エノク書」といえばこの第一エノク書を指します。エノクは創世記5:22で「神と共に歩んだ」と記されている人物でアダムより数えて7代目になります。更に3代あとがノアになります。エノクについては5:24で「神が彼を取られたので、彼はいなくなった」と記されているため、生きたままで天にあげられ、死をみなかった人物とされ、その後、ユダヤ教のなかで黙示を述べる人物として定着して行きました。エノク書は5つの部分に分けられますが「人の子」に関連するのは最初のふたつです。1-36章までは「寝ずの番人の書」とよばれ、37-71章が「たとえの書」とよばれています。文書の成立年代については、全く決着はついておりませんが、「寝ずの番人の書」はBC3cの成立と推測されています。その時代は、エジプト支配の時代で、「緩い支配」といわれ、ユダヤも事実上独立国的な自由があった時期です。経済的には繁栄した時期で、商業資本のトビア家が台頭していました。

　他方、「たとえの書」はキリスト教的な雰囲気の表現もあることから文書が最終的にエチオピア語に翻訳されたのはAD270頃と見られています。しかし、この断片がアラム語で死海写本から発見され、その元の文書はもっと古い時代の成立だ、ということが明らかになりました。クムラン教団の文書では「巨人の書」と呼ばれていました。この「巨人の書」はBC2c末頃に書かれたのではないかと推測されています。この時代はハスモン王朝の時代ですが、ハスモン王朝が権力安定志向になりヘレニズム化のお先棒を担ぐようになった時期です。パリサイ派、エッセネ派が分離し、ハスモン王朝批判をしていました。「巨人の書」はこのエッセネ派の文書です。「譬えの書」のどの部分が「巨人の書」に存在したかは解りませんが、この「人の子」に関する部分は「巨人の書」には含まれておらず、その更に元になっている文書に在った部分ではないか、と考えることができます。そうすると、「たとえの書」の人の子に関する記述は、「寝ずの番人の書」における人の子の記述を受けて、BC2cのどこかで黙示されたもの、と推測することができます。キリスト教的な部分があるからと言って、紀元後と考えなければならない程キリスト教的ではありません。将来の時（とき）に関する黙示とみることができます。つまるところ「寝ずの番人の書」はBC3c、「たとえの書」はBC2c末と仮置きできます。そもそも何語だったのかについても種々の説有り全くまとまっていないようですが、アラム語説が有力なようです。これはシリア・メソポタミアの言語でヘブル語と兄弟の言語です。

　「寝ずの番人の書」における「人の子」をみると単純に被造物たる人間の意味で使われるのが多いのですが、10:21のように人の子が特別な天における存在に近づいている表現もあります。「人の子らはすべて義しいものとなり、すべての民は私を神として崇めたたえ、わたしにひざをかがめるであろう。地はいっさいの腐敗、一切の罪からきよめられ、災禍、苦難にいっさいあうことなく、世々に亘って、永遠に、二度と洪水をその上にわたしは送らない。」とあります。これは明らかにノアの洪水の話と関連して「義人」としての人の子について語っています。他方で「人の子」の罪についての指摘もあります。13:2には「憩いも望みも慈悲もきみは得られないであろう。きみが無法を説いたからであり、人の子らにきみが示したありとあらゆる瀆神（とくしん）、無法、罪のわざのためである。」と書かれています。これはエノクが悪霊の一人アザゼルに語ったことばであり、人の子もアザゼルの甘言によって人の子が罪に堕ちたといって居ます。20章ではこの人の子の罪に関することが更に述べられています。これらを見ると、「寝ずの番人の書」における人の子はそもそもは神の傑作である罪なき人間のことを指していたが知恵の実の事件で神に背き、ノアの大洪水を通して神の祝福が回復し、しかし、悪霊の働きにより、罪の深淵に引きずり込まれた存在、と考えられた、と推測できます。罪に堕ちたアダムの子孫という訳です。

　次に「たとえの書」における「人の子」をみます。39:1では「さて、そのときには、選ばれた聖なる子らが上なる天からおりてきて、彼らの種は人の子らとひとつになるであろう。」と記されており、天よりの「聖なる子ら」によって「人の子」が救い出され、「聖なる子ら」と一体になる、と述べられています。更に39.5では「そこにわたしの目は見た。彼らの住所はみ使いたちとともにあり、彼らの安住の地は聖者と共にあり、彼らは、人の子らのためにとりなし、乞い願い、祈っている。彼らの前には義の水のように流れ、あわれみは地の面におく露のごとく、彼らの世界ではこのようなありさまが永久につづくのである。」とあり、天的存在者のとりなしにより「人の子」が義人とされる様が描かれています。40:1-4では「高齢の頭をもった者」に同行しているみ使いのいひとり「人の子」について語られ、「王者、権力者たちをその座から、力ある者たちをその席から引きずりおろし」といわれています。この箇所は「王的メシア」を想像させるものです。「人の子」が「王的メシア」になって行く途上、と推測されます。またここの表現はダニエル書第7章の「人の子のようなもの」に関する表現に酷似しています。また権力者をその座から引き下ろす、というのはマリアの賛歌に出てくる表現でもあります。このあとは救いをもたらす者として「人の子」が描かれています。69:26には「彼ら（天使）は歓喜にひたり、人の子の名が彼らに啓示されたことについて、ほめたたえ、賛美し、崇めた。」という表現もあります。71:17では「このように、その人の子は長寿を賜り、義人たちは平安を賜り、彼の道は義人たちに対して、霊魂の主の名によって永遠に公正である。」と言われ、人の子が永遠の祝福に入れられる、とまで言われています。新約聖書で神に最も近い存在である「神の子」の姿です。おそらく「たとえの書」の原型となった文書・伝承はダニエル書第7章の書かれたBC2c中頃に形をとったものと考えられます。「高齢の頭をもった者」と「人の子」の組み合わせは、「ダニエル書の「日の老いたる者」「人の子のような者」に対応しているようです。「霊魂の主」というのは神様のことであり視覚的には「高齢の頭をもった者」です。

　エノク書での「人の子」は一応ここで終え、次は、新約聖書における「人の子」を見てみます。この研究で、近代における先駆け的存在として有名な人物はドイツの神学者ブルトマンです。この人は所謂自由主義神学の旗手としてなにかと問題視される人物ですが、その学問的厳密さや着想の良さには傑出した人です。彼は福音書における「人の子」を三つのカテゴリーに分類しました。まず第一は彼が「現在の活動に関する「人の子」」というものでつまるところイエス様が間接的に自らをさして「人の子」とおっしゃっているカテゴリーです。ズバリご自身の事を指しているのではないか、と思われる箇所もあります。例として、マタイ11:19を読みます。「人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『あれ見よ。食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言います。でも、知恵の正しいことは、その行ないが証明します。」とあります。

　次は「終末的福音に関する「人の子」」と言われているもので終末の時「人の子」が現れさばきを行う、という表現です。マタイ19:28「そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」とあり、マルコ13:26「そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」とありますし、ルカ22:69「しかし今から後、人の子は、神の大能の右の座に着きます。」と言われています。神の同伴者となった「人の子」が終末の日にさばきを行う、ということです。この該当箇所では救いの事は明示的に語られていませんが、ルカ12:26に「人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。」と言われているところを見ると、ノアのように救われる者も居ることは言われています。

　三つ目は「受難に関する「人の子」」と分類されているものです。マルコ8:31「それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」が代表的な箇所です。この分類に入れられているのはマタイがほとんどですが、ルカに一か所あります。24:7「人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」とあります。中間期に醸成されたメシアが最後の日に現れ、他民族を裁き、イスラエルを回復する、というメシア思想と深く関連をもっています。

これらの分類に該当しない箇所とされているのが31か所あります。

最初の分類の「現在の活動に関する「人の子」」というのはつまるところ主イエスご自身のことをおっしゃっているのが明白です。イエス様は十字架刑につく前に、御自分のことを「神の子」と認めています。ユダヤ人にとっては「子、子孫」はその祖先と同一視されますから、「神の子」と認めると言うことは自らをいわば「神」である、ということと同じですから「死に値する」となったのです。従って、この分類は「神の子としての「人の子」」と言うこともできます。第二の分類の「終末的福音に関する「人の子」」はこのカテゴリーの節を見ていくとこの人の子が最後の日に来臨するということを言っています。それも栄光の王として来臨です。マルコ14:62では主イエスが自らをこの栄光の人の子をおっしゃっているようです。あえて一言で言えば「神の使者としての「人の子」」と言えるかもしれません。明らかにメシアと結びついています。第三分類は「受難に関する「人の子」」の部分が当時のユダヤ人にとっては最も理解困難な部分でしたでしょう。イザヤ書53章の「苦難の僕」は民衆受けするメシア像ではありません。マルコ10:45ではイエス様が「贖いの代価」とおっしゃられているので苦難の僕たる人の子の業は「贖罪」にあることが言われていますが、英雄待望的メシア期待からは全く失望です。従って「神の子・人の子」、「神の使者・人の子」、「苦難の僕・人の子」の三分類でみてみます。未分類とされた箇所はブルトマンが主イエスの真正の言葉かどうか疑問有、と言った節であり、内容的にはすべてこの三分類のどれかに当てはまります。

新約における「人の子」の三部類を念頭に置きつつ、旧約聖書の「人の子」を振り返ってみます。多様な意味で「人の子」が使われています。まず最初に「人の子」という言葉のヘブル語です。直訳すると「アダムの子」です。子が複数の場合もあります。またアダムに冠詞が付く場合とついていない場合があります。私調べた限りでは、単数・複数、冠詞あり・なしによって何かその差を意味づけることはできない、と思います。「人間の子」という表現もありますが「人の子」と言う場合、人類の最初「アダム」の子孫である、ということを意識した表現です。旧約聖書には一部アラム語で書かれた部分がありますが、アラム語では「アダム」と「人間」が言葉の上で区別されておらず、ヘブル語では「人間」という言葉が使われています。ギリシャ語は「ホ・ヒュイオス・トゥ・アンスロプ」で「人間の子」です。従って新約聖書の「人の子」は創世記の「アダムの子」の意味合いは薄れています。当時の一般民衆の言葉はアラム語ですから、アラム語も「アダム」と「人間」の言葉上の差はありませんので、直接的に「アダムの子」というのはヘブル語聖書だけです。しかし、新約の民にも、旧約の昔からの「アダムの子」のイメージは継承されていたと思われます。アダムは世界で最初の人間です。しかも、神様の命に背くまではエデンの園で幸福な生活でした。「アダムの子」はまだ背きの罪に陥る前のアダムの子孫です。本来の人間の姿、と言えます。自分たちを、世界で最初の人間の子孫である、という言い方はメソポタミアではかなりポピュラーだったようです。

モーセ五書と歴史書における「人の子」を見てみますと、単に「人間」と言うのに代えて「人の子」を使っているケースとイスラエルの民をさして「人の子」と言っている場合があります。単なる人間の代わりは創世記11:5で「そのとき主は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。」とあります。またイスラエルの民＝「主の民」の意味では申命記32:8があります。「いと高き方が、国々に、相続地を持たせ、人の子らを、振り当てられたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、国々の民の境を決められた。」とあります。「人間」の意味と「主の民」の意味です。

エレミヤと同時代の預言者エゼキエルの文書にはなんと「人の子」が93回も出てきます。すべてがエゼキエルへの呼びかけのことばとして使われています。エゼキエル書2:1に「その方は私に仰せられた。「人の子よ。立ち上がれ。わたしがあなたに語るから。」」とあります。主がエゼキエルに対し、「人の子よ」と呼びかけているのです。この呼びかけの言葉としての「人の子」は預言者エゼキエルの代名詞となり、「預言者としての人の子」の意味が付加されていったと考えられます。第二・第三イザヤには3箇所ありますが、まず第三イザヤ56:2「幸いなことよ。安息日を守ってこれを汚さず、どんな悪事にもその手を出さない、このように行なう人、これを堅く保つ人の子は。」とあります。これは旧約的表現では「義人としての人の子」です。義人はエノク、アブラハムのように神の命に忠実に歩んだ人です。問題は第二イザヤの52:14です。苦難の僕が展開される53章の直前です。「多くの者があなたを見て驚いたように、――その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた――」とあります。苦難の僕は本来の人間「人の子」とは違っていた、と言われています。苦難の僕はもしかしたらツァラアトだったかもしれません。醜い姿でした。もちろん、伝統的な罪なき義人としての「人の子」とは反対極にあるものです。しかし、私はかなり大胆な仮説を持っています。この苦難の僕が「人の子」と同一視されるようになっていき、人の子の意味として「苦難の僕としての人の子」が付加されていったのではないか、という仮説です。ミイラ取りがミイラになったみたいのものです。証明はできませんがありえないことではないと思います。新約における「苦難の僕としての人の子」の源流を探す中でこの仮説に思い当たったのです。三分類のなかで最も源に遡るのが難しいのがこの「苦難の僕」です。

更に旧約における人の子をみると「伝道者の書」の人の子が少々目立ちます。10個でてきます。1:12-13には「伝道者である私は、エルサレムでイスラエルの王であった。/私は、天の下で行われるいっさいの事について、知恵を用いて、一心に尋ね、探り出そうとした。これは、人の子らが労苦するようにと神が与えたつらい仕事だ。これは伝道者本人の言葉で知恵によってすべてを探究するという「つらい仕事」を神から与えられた、と言っている。9:3には「同じ結末がすべての人に来るということ、これは日の下で行なわれるすべての事のうちで最も悪い。だから、人の子らの心は悪に満ち、生きている間、その心には狂気が満ち、それから後、死人のところに行く。」とあります。人の子はこの社会の上層階級の人間たちで悪に染まっている、と言われています。その他のところも見てみると、「人の子」は社会の上層階級の人間たちのことを言っています。賢者と言われていた人々です。伝道者の書はソロモンの著作と言われますが賢者たちを褒めているだけではありません。厭世的な風潮の中に在って、伝道者は人生の意義を探そうとしている賢者なのです。「賢者としての人の子」です。「伝道者の書」は中間期に成立した文書です。知恵文学と称せられるジャンルです。

時代的にはこの頃の文書であるのが最初にのべたエノク書です。そして中間期文書の代表的なものとしてダニエル書です。これはその後、多数書かれる黙示文書の先駆け的存在です。ダニエル書で「人の子」が登場する節で最も有名なのが7:13です。「私がまた、夜の幻を見ていると、 見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、 年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。」とあります。天の雲に乗ってこの世に来たのが「人の子のような方」であり、その方は「年を経た方」のもとに進んだ、といわれています。この7章はアラム語文書ですので「アダム」と「人間」は同一の単語ですから「人間の子ような方」ともいえます。単数形です。「年を経た方」というのは伝統的には「日の老いたる者」と訳されていたものです。「年をめされた方」の意味ですが神様のことです。このダニエル書の箇所と似た表現が新約聖書黙示録1:14にあります。「また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。」とあり、ここでも「人の子」が雲に乗ってこられる、といわれています。黙示録の「人の子」がこの世に来られることは主イエスの再臨と理解され、ダニエル書の「人の子のような方」は主イエスの来臨のことを預言したものだ、と解釈されたのです。もう一か所、類似の箇所をあげます。エゼキエル書1:26です。「 彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。」とあります。「人間の姿に似たもの」が空のはるか上の方の王座に居る、といっています。この三か所を時代順に見ると、「人間の姿に似たもの」、「人の子のような方」、「人の子」となります。他方で旧約聖書での「人の子」の使用の流れを考えると、エゼキエル書の「人間の姿に似たもの」、ダニエル書の「人の子のような方」が旧約聖書での「人の子」と同一視されていくプロセスが看取されます。ダニエル書のこの箇所での使用方を「人の子のような方である人の子」と称しておきます。

ダニエル書での「人の子」の例はほかにもあります。2:38「また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手に与えられました。あなたはあの金の頭です。」とあり、ここはネブカデネザルの夢解きの場面ですので、主なる神はその民をネブカデネザルに与えたというのですから、ここでの「人の子」は「主の民としての「人の子」です。5:21「そして、人の中から追い出され、心は獣と等しくなり、野ろばとともに住み、牛のように草を食べ、からだは天の露にぬれて、ついに、いと高き神が人間の国を支配し、みこころにかなう者をその上にお立てになることを知るようになりました。」の最初の「人の中から」がアラム語で「人の子の中から」です。これはベルシャツァル王の夢をダニエルが解く場面ですが「人」とは「本来の人間」乃至「被造物としての人間」です。最初の人類アダムを指しています。「本来の人間としての「人の子」」といえるでしょう。8:17「彼は私の立っている所に来た。彼が来たとき、私は恐れて、ひれ伏した。すると彼は私に言った。「悟れ。人の子よ。その幻は、終わりの時のことである。」」とあります。ここでの「人の子」はダニエルに対する呼びかけの言葉として使用されており、エゼキエル書での呼びかけの言葉と同じです。ダニエル書8章以降はヘブル語ですので、ここの「人の子」は「ben-a:da:m」即ち単数の「アダムの子」です。エゼキエル書と同じです。これは「預言者としての「人の子」と言えるでしょう。最後が10:16です。「ちょうどそのとき、人の姿をとった者が、私のくちびるに触れた。それで、私は口を開いて話し出し、私に向かって立っていた者に言った。「わが主よ。この幻によって、私は苦痛に襲われ、力を失いました。」とあります。この「人の姿をとった者」は直訳しますと、「アダムの子等に似た者」です。「bene:-a:da:m」で「アダムの子等」です。ダニエルのくちびるに触れた方のことですから、何らかの天的存在であり、今までの人の子の使用方法から言えば「神の使者としての人の子」ということになろうかと思います。ダニエル書の時代には「天使」の存在も敬虔なハシディームの人々には信じられていましたから「天使としての人の子」ということもできます。

旧約聖書及び中間期文書における「人の子」の使用方法を見てきましたが文書成立の時代順にまとめてみます。「モーセ五書」では「単なる人間としての人の子」「主の民としての人の子」があります。エゼキエル書は「預言者としての人の子」です。第二・第三イザヤでは「義人としての人の子」の使用例が見られます。また、少々先走った解釈ですが、イザヤ書53章の主の僕と関連し「苦難の僕としての人の子」があります。「伝道の書」における「賢者としての人の子」もあります。そして「エノク書」になります。「寝ずの番人の書」においては、「単に人間としての人の子」以外に「義人としての人の子」が見られます。それから重要なのは「罪あるアダムの子孫としての人の子」です。次に「たとえの書」です。“天よりの聖なる子ら”という表現が出てきますが、いままでの表現に当てはめれば「神の使者としての人の子」ないし「天使としての人の子」と言えます。また「義人としての人の子」もでてきます。天的存在者のとりなしにより「単に人間としての人の子」が「義人としての人の子」に代わる、という点が重要です。またマリアの賛歌を思わせる「王的メシアとしての人の子」も出てきます（この箇所はもっと時代が下がってからの箇所かもしれませんが）。神の永遠の祝福を得る人の子も登場致しますが、これは「義人としての人の子」の一つと言えると思います。そして問題のダニエル書。「人の子のような方」というのは黙示の中で主なる神から権威を授けられる存在ですから内容的には、「神の使者としての人の子」に分類できると思いますが、ことの重大性を考慮し、独立して「人の子のような方としての人の子」としておきます。

これらの「---としての人の子」を新約聖書における人の子用法の分類に当てはめてみます。「単に人間としての人の子」は新約ではこのような用法はありません。「主の民としての人の子」「義人としての人の子」「賢者としての人の子」は新約での分類では「現在の活動に関する人の子＝神の子としての人の子」の流れ、と言えるでしょう。この世での出来事との関連での「人の子句」の使用です。「神の使者としての人の子」や「預言者としての人の子」「天使としての人の子」「人の子のような方としての人の子」は新約での「人の子」分類の第二の「終末的福音に関する人の子」に対応するとみることが出来るでしょう。最大の問題は新約での第三分類「受難に関する人の子」です。かなり無理した解釈で「人の子」を解釈した、「苦難の僕としての人の子」がこれに該当します。もう一つ、エノク書の「罪あるアダムの子孫としての人の子」が問題です。受難に関する人の子は、本来の人間が、神が与えた自由意志の誤用から罪の身となり、ユダヤ人は律法遵守によって神の恵みを回復しようとしたのですが、それは出来ませんでした。結局、神の子が罪を背負う、という形での救いの福音とならざるを得なかった、というのがキリスト教のメッセージです。その意味で、人の子の罪にあることの深刻な理解は、その裏としての希望の福音につながります。「罪あるアダムの子孫としての人の子」から、「受難に関する人の子」へはもう一歩です。それが主イエスによって現実のこの世界で言葉となりました。

「人の子」はこのように各種の意味合いが付され、その意味するところは一言では言い難い、ということになりますが、私たちキリスト者にとって最も重要なのは「人の子のような方としての人の子」です。ダニエル書7:13に登場し、聖書の最後の文書である黙示録1:14に同じ言葉で登場します。ダニエル書ではこの「人の子のような方」が神の国を受け継ぐということが語られ、黙示録ではこの「人の子のような方」が終わりの日にこの地上に来られる、と言われています。ダニエルは「神の国」の希望を幻によって見ました。そして我らの主イエス・キリストとともに「神の国」は来ました。そして主は再びこの世にいらっしゃって「神の国」を完成させます。私たちは「主よ、来たりませ、マラナタ」と叫びつつその「神の国」の国籍を持つ者として主を証するのです。祈ります。

（天にまします父なる御神様、今日の学びの時を感謝致します。今日は「人の子」について学びました。「単に人間としての人の子」に始まり、「苦難の僕としての人の子」に至るまで多様な意味を含んでいる言葉です。「人の子のような方」が再臨し、「神の国」の完成の時が直（すぐ）に来ますように。最後の時の予兆は既に多数あります。私たちが、「神の国」の証人として歩むことができますように。主のみ名により祈ります。アーメン）